

『生活文化研究所報告』第四十九号
二〇二二年三月刊 別刷

架空平家一門伝

佐々木 紀一

架空平家一門伝

佐々木 紀 一

筆者はこれまで、平家一門の考証を成し、『尊卑分脈』には釣られないが、古記録・一部『平家物語』伝本のみに見える人物を、他の中世系図との対照より、実在が確認出来る事を確認した⁽¹⁾。その中で『源平盛衰記』の中に実在不明、または実在人物が前名で登場する例を指摘し、その成立についてでも推定した⁽²⁾。本稿ではその後調査で来た中世系図⁽³⁾をも参照し、軍記や物語に於ける架空人物の成立と、問題の中世系図の成立について考察したい。

一、兼盛

『源平盛衰記』卷三十一「維盛借妻子遺」⁽⁴⁾の都落に、

新三位中将資盛・左中将清経・左少将有盛・侍従忠房・兼盛・備中守師盛五六人ノ弟達

と登場する小松の公達の兼盛が、他の現存『平家』諸本、古記録に見えず、都落に登場する筈のない架空の人物と思はれる事、一方、文禄本『平家』卷十二付載の系図⁽⁵⁾に同人が見えるが、『盛衰記』よりの引用ではなく、『盛衰記』は兼盛を載せる別の系図を利用したと推定した(拙稿⁽²⁾)。

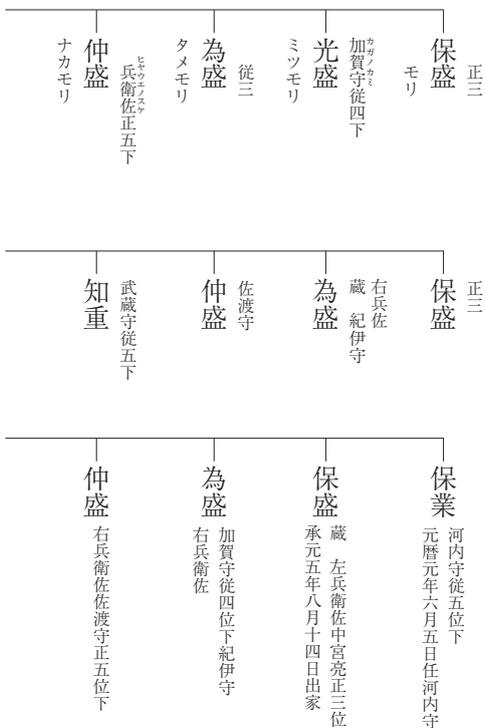
然るにその後、兼盛を掲載する他の系図に気付いた。天理大学図書館吉田文庫蔵『平氏系図』一帖四紙(吉六二一十八)で、『吉田文庫神道書目録』によれば近世初期写とある。法量は、豎二四・三糧で本文一筆。同系図は、

- 1、堂上平家(時忠一族)
- 2、平家郎等家貞家系
- 3、北条氏
- 4、坂東平氏(①千葉氏・②秩父氏(畠山・小山田)・③三浦氏・④長江氏)
- 5、清盛流

より成るが、1、2、4は簡潔で鎌倉初期の族人まで、3も北条氏各流を鎌倉幕府滅亡の族人迄簡潔に載せるから、族人を詳しく載せるのは5の清盛流と云ふ事に成る。以下、吉田本『平氏』と略する。

成立時期は不明であるが、5の頼盛の俗人男子を見るに⁽⁶⁾、

(吉田本『平氏』) 『尊卑』 『脱漏』



とあり、藤原顕憲の子で、時子・時忠の異父弟能円⁽¹²⁾を平時信子に位置づける特殊な点で共通するが、その他の記載人物・方法では異なる。また2の平家郎等の家貞家系であるが、

〔吉田本『平氏』〕



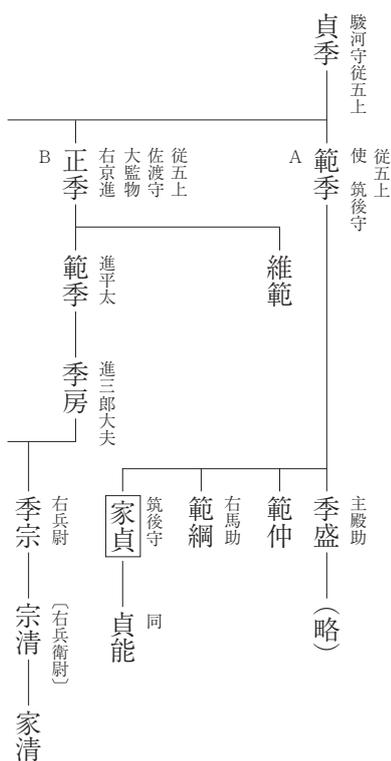
〔文禄本系図〕 (形態を変へてゐる)



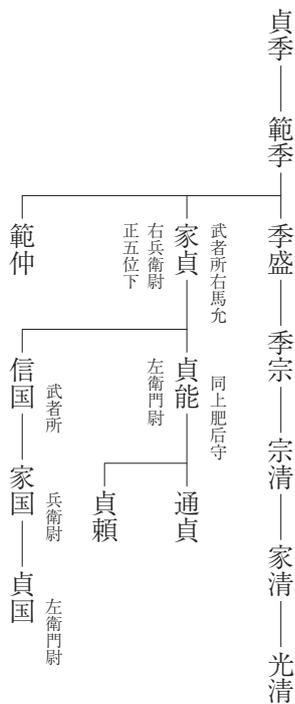
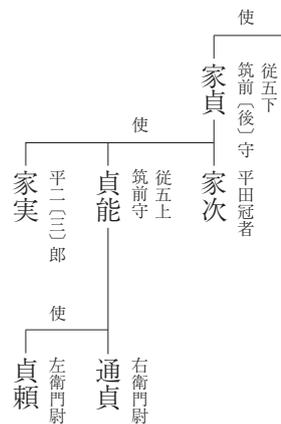
とあり、文禄本系図の承接には誤りがあるが、端的に家貞迄、両者一致しない事が分かる。目下、両系図間に直接の交渉は無いと考へるものである。

また『盛衰記』巻一「五節夜闇討」は家貞の家系について、I「進三郎大夫季房子」・II「木工右馬允貞光孫」とするから吉田本『平氏』に一致しない。長門本・文禄本・中院本⁽¹³⁾は『盛衰記』に同じで、それ以外の現存『平家』はIのみの言及で(延慶本・四部合戦状本・『源平闘諍録』・南都本・『平家打聞』巻五「貞能」)⁽¹⁴⁾とも一致しない。

寧ろ大系本『尊卑』では、A範季流とB正季流の二箇所に掲出されるが、



そのA範季流に近い事に成る。然るに『古系図集』・中条本には、A範季流家貞が無く、菊亭本『尊卑』・『脱漏』「平氏系図」では、囲みの家貞に「イ」(菊亭本『尊卑』)・「異本」(『脱漏』)の標記がある。また妙本寺本にはBの正季流がなく、

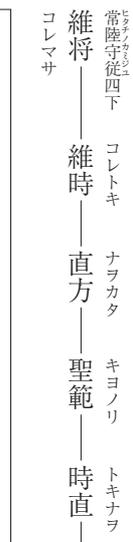


とA範季流であるが、吉田本『平氏』と一致しない。これからすると現在見る『尊卑』はA範季流の家貞を後補したものだらう。

二、吉田本の性格及び『須磨寺之笛之遺記』依拠の系図

依然、吉田本『平氏』の成立、特に『盛衰記』との関係が問題である。諸系図で異同が大きい、3の北条時政に至る歴代を見るに、

〔吉田本『平氏』〕

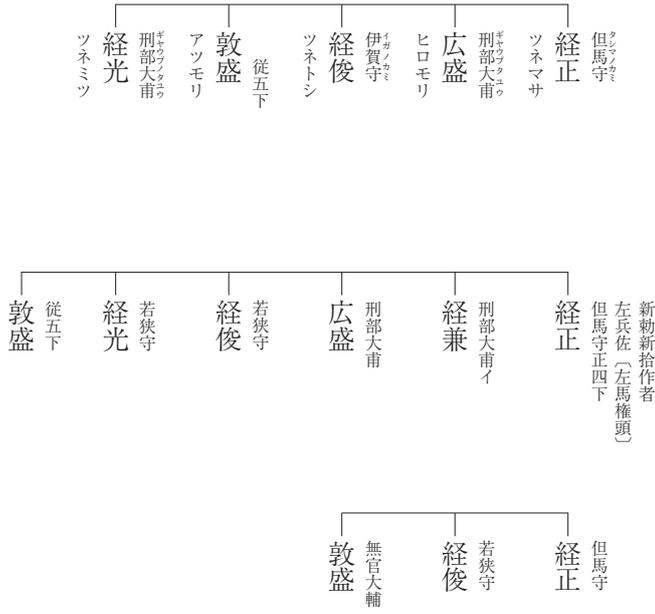


とある。『古系図集』・『尊卑』・野津本『北条系図』⁽¹⁵⁾では時家・時政の間に、時方が入る事以外は吉田本『平氏』に同じである⁽¹⁶⁾。また5の経盛流で、

〔吉田本『平氏』〕

〔尊卑〕

〔須磨〕



と、広盛・経光を共に持つのは『尊卑』・『脱漏』である⁽¹⁷⁾。広盛は『盛衰記』・四部本にも登場するが、経俊の伊賀守任官は史実であるものの⁽¹⁸⁾、『平

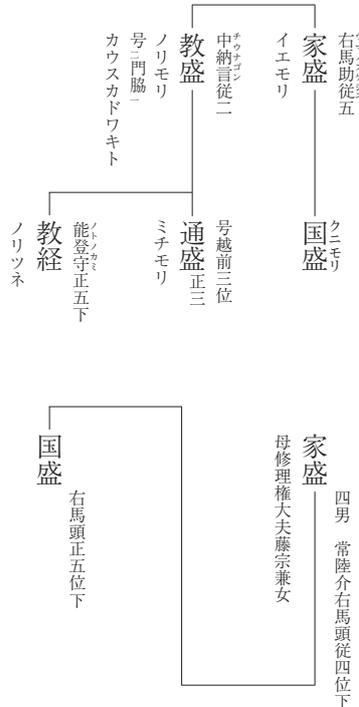
家』には「若狭守」としか見えない。

更に前掲の5の頼盛流で、知重を持つのは『尊卑』・『脱漏』・妙本寺本・板本『源平系図』であるから、吉田本『平氏』は比較的『尊卑』・『脱漏』に近い所が有る事になる。

また先に『盛衰記』卷三十八「平家頸懸獄門」の一の谷の戦死者の交名にのみ見える「前備前守国盛」について、その官途を辿ったが⁽¹⁹⁾、吉田本『平氏』と『脱漏』では、共に国盛を家盛子とする点で共通する(『脱漏』に近い菊亭本『尊卑』にはなし)。同時に教盛子の教経までを挙げれば、

〔吉田本『平氏』〕

〔脱漏』〕



となる。然るに『須磨』にも「家盛の息には、備前守国盛」と見える。同書は『盛衰記』を利用するが⁽²⁰⁾、冒頭の平家一門の系譜は何らかの系図に拠つたと推定される。即ち、

〔須磨〕 忠盛に子息あまたあり、太政大臣清盛公(但是白河院の胤也云々)、修理大夫経盛、門脇の中納言教盛、從四位家盛、池の大納言頼盛、薩摩守忠度、法勝寺の執行能円也(『小枝』同)
〔盛衰記〕

忠盛朝臣子息アマタ有キ、嫡子清盛、二男経盛、三男教盛、四男家盛、五男頼盛、六男忠重、七男忠度、以上七人(卷一「忠雅播磨米」)

とあるが、一致しない。これはそれでも『須磨』の改変の可能性があるとしよう。しかし『須磨』で、清盛子に、

五男三河守知度、六男淡路守清房、七男春宮少進維俊、八男八三位僧都全親也（『小枝』では波線なし）
とあり、教盛子に、

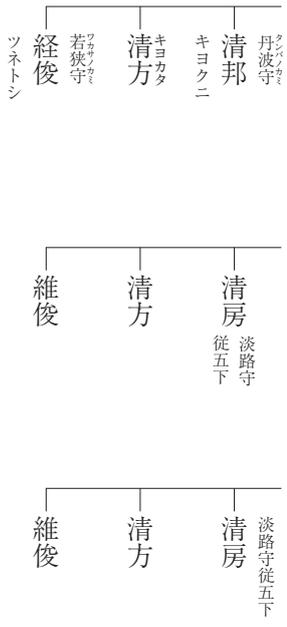
門脇殿の子息には、越前三位通盛、能登守教経、中納言律師忠快、散位業盛、盛縁法師等也（『小枝』では波線「さんみ」）

とある傍線は、『平家』には登場しない実在人物で⁽²¹⁾、『須磨』が系図を利用して取り込んだとして良い。

三書の脇書が一致せず、吉田本『平氏』と『脱漏』の坂東系図の大きな相違からすると、吉田本『平氏』が『脱漏』・『須磨』依拠系図よりの派生と証明する事は困難で、寧ろ『須磨』・『塵荊鈔』巻九「平氏之事」、更には上杉本『平家けいつ』⁽²²⁾等々、室町時代には多種の平家系図が伝来してゐたと見るべきであらう。

現在の所、吉田本『平氏』の成立過程の一端の手掛かりになると思はれるのが、3の清盛子で女子の後に付される男子の箇所、

（吉田本『平氏』）（延慶本系図） 『野辺』二〇「平氏系図」



とあるが、實在不明の清方を釣るのは他に延慶本系図・『野辺』二〇「平氏系図」で、維俊の位置からすると、吉田本『平氏』の経俊は、これを改めたものであらう。但し4の坂東系図部も延慶本系図の収載人物にほぼ重

なるが、次の例の様に完全に一致しない。先の北条氏系図でも延慶本系図と一致しないから、これまた直接の関係は無いと判断される。

（吉田本『平氏』）（延慶本系図）



吉田本『平氏』1で時忠猶子⁽²³⁾の時兼を、時忠子に釣る点、妥当で、他系図に見えないが、その歴史的価値が、概して高くない事は確かである。またその全体の成立の究明にも程遠い。内閣文庫蔵『本朝皇胤紹運録』（一四四—〇六六）には、『盛衰記』・『吾妻鏡』より各人の伝記を纏める源平銘々伝があるが、その「土佐守宗実」に、「盛衰兼盛ト云」（電子公開）と、宗実と兼盛を同一人とする。宗実は都落してゐないから、この比定は誤りである。確かに何人かの前名である可能性はあり、また吉田本『平氏』の兼盛が、『盛衰記』に淵源を持つ可能性は完全に否定出来ないのだが、目下、兼盛は由来不明ながら、中世平家系図に存在する人物で、『盛衰記』が採用する過程は猶、不明とせざるを得ない。

三、六代御前の実名

維盛嫡子で、文覚の懇願で助命された六代御前は、『平家』ではその後、頼朝の猜疑を避けるため、出家し、父の後生を用つたとするが、文覚の謀反に連座し、切られたとする。

六代御前十六と申し文治五年の春の比、うつくしげなる髪をかたのまはりにはさみおろし、かきの衣、袴に笈などこしらへ、聖にいとまこうて修行にいであられけり（覚一本卷十二「六代被斬」）

とある事を見るに、母の願ひと裏腹に元服する事は無かつた事になる。『平家』諸本には見えないが、『尊卑』・妙本寺本・板本『源平系図』に法諱「妙覚」とあり、諸書により時期が異なるが、「六代禪師」(24)・「六代房」(25)とあり、出家してゐた事が分かる。

『大日本史料』四之五、建久九年二月五日条にも引用されるのが、大隅の禰寝氏の家譜『新編 禰寝氏正統系譜』で、

高
清

(略)

建仁三年十一月廿七日、於_ニテ関東田越川_一ニ、被_レル_ル誅_セ、年三十、法

名良潮(26)

とあり、『参考源平盛衰記』(27)に紹介されるが、同氏の本姓は建部氏で(28)、
假冒であると見るべきである(29)。

六代の刑死時期が現存史料と異なるのだが、一武家の假冒の例であるとすれば、それ以上の考察は不要であらうが、『平家物語』の平家一門を花に比した『平家人物論』の『墨海山筆』別集卷八所収本(30)にも、

六代

御母新大納言女中御門成親卿
高
清

と見え、松尾葦江氏の諸本校異によれば、神宮文庫蔵『平家人物論』も高
清を持つ(31)。一方、蓬左文庫本(32)・慶応大本・貞享三年板本(33)・穎原
本(34)にはなく、松尾氏校異では彰考館本・刈谷本(35)、更には静嘉堂文
庫本(36)にも高
清が無いから、天保十四年西田直養筆写の本奥書を持つ墨
海山筆本が後補で、元禄二年成立の『参考源平盛衰記』の利用の可能性が
ある。しかし「高
清」は禰寝氏の創作ではない。『武家年代記』中巻の建
仁三年条にも、

十一廿七頼家誅平高
清六代事也(増補統史料大成)

と同説が見え、同書に他に禰寝氏との関係は見えないからである。

これも書き入れ段階は不明だが、大東急記念文庫蔵慶長十七年写の松雲

本『平家』巻末の系図(37)に、

六代

三位中将
高
清

惟盛
熊野那智浦

入水廿七

とあり、同系図の書入れに、

讚岐守正盛子、備前守忠盛子

太政大臣清盛子、小松内大臣重盛

子、三位中将惟盛子、六代高
清

清盛祖父正盛_{ヨリ}高
清_{マテ}六代

とあり、本文(巻九「惟盛出家」)の書入れにも、

「在新中将資盛所

抑唐革_ト云_レ鎧、小烏_ト云_レ太刀ハ平將軍貞盛_{ヨリ}当家_ニ伝_テ維盛_{マテ}ハ嫡_々

「高
清_{タケ}

二九代ニ相当ル、若シ不思議_ニ世モ立直タラハ、六代_ニ賜_ヘシト申セト

コソ宣ケレ

と、高
清が見える。巻末の系図部分は、菊亭本『系図略』等(38)に同じで
あるから、この書入れは後補と見るものであるが、慶長十七年(一六一二)
には成立してゐた事になる。

また室町後期成立の(39)、東大史料編纂所蔵『皇代記』御系図『土御門紀(建
曆)に、

同三年三月廿七日頼家誅平高
清、平家嫡男惟盛卿息号六代是也、文
覚
為資時_ハ云_レ三位禪師妙覚(電子公開)

と、月が異なるものの、同じ記事が前半にある。同記には文覚中興の神護
寺関係の記事が多いが、これも詳細不明である。建仁三年の刑死と言ひ、
元服と言ひ、不審点が多いが、室町時代末期には、俗人高
清説が流布して
ゐた事が確認できた。六代生存説(40)との関係も不明で、その成立事情は
後考を俟ちたい。

四、平九郎通正

平九郎通正は『保元物語』研究者も、また歴史研究者も注意を払って来なかつた。それも当然至極、『保元物語』に一か所、新院側に加担した父平忠正と共に処刑された子の一人として挙げられるだけだからである。

平馬助忠正法師、嫡子新院藏人長盛、皇后宮傳長忠綱、左大臣勾当正綱、平九郎道正父子五人（半井本巻下「忠正家弘等被誅事」⁽⁴¹⁾）とあり、宝徳本系でも、

平右馬助入道忠正、嫡子新院藏人長盛、同次郎忠綱、同三郎政綱、平九郎通正父子五人（宝徳本）⁽⁴²⁾

と、親子五人を清盛が斬つたとする。当該本文が不安定な京図本系⁽⁴³⁾では、

（根津本）平馬助入道忠正、嫡子長盛、次男忠綱、道正父子五人（蓬左本・竜大本同）

（班山本）へいまのすけ入道た、まさ、ちやくしなかもり、二なんた、つな、まさつな、みちまさおやおこ五人

（京図本）平右馬助入道忠正、ちやくし兼盛、次男正綱父子五人（早大本同）

とあるが、父子五人は同じである。

所が兄弟の長盛・忠綱・正綱と異なり、通正のこの時の死刑及び、それ以前の実在が古記録に確認出来ないのである。即ち刑死者は、『兵範記』保元七月二十八日条によれば、

今夕、被行斬罪云々

忠貞・長盛・忠綱・正綱・道行^{忠貞郎等}

已上播磨守清盛朝臣於六波羅辺斬之⁽⁴⁴⁾

とあり、郎等の道行が挙げられるが、通正が見えない。その前日の罪名宣下にも、

前馬助平忠貞（中略）平国正 院藏人同長盛 左大臣家勾当同忠綱

平正綱 同正方（『同』二十七日条）

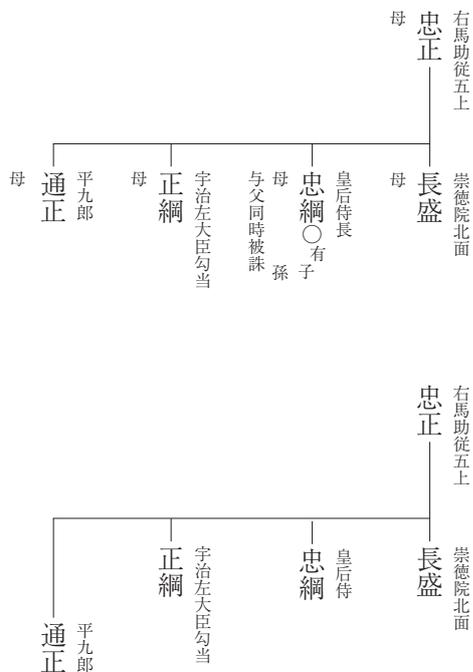
と通正はない。また『帝王編年記』同八月二十九日条（新訂増補国史大系）にも、刑死者として、

忠正法師（中略）長盛（忠正息、新院藏人）、忠綱（同、左府別当）、国正（同）

とあるが、通正は見えない。

無論この時、以上の記録に漏れた刑死者が存在した可能性のある事は多田頼憲・盛綱親子の例を指摘出来る（拙稿⁽²⁾）。また平九郎通正は、南北朝時代編纂とされる『尊卑分脈』に掲載される。その伝本で、弘治二年（一五五六）万里小路惟房写の本奥書のある菊亭本『尊卑』を挙げれば、

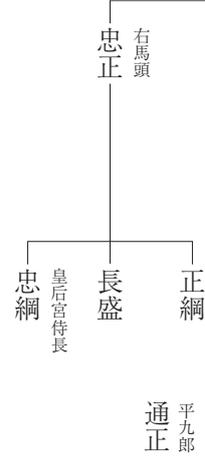
（菊亭本『尊卑』）（広橋本）



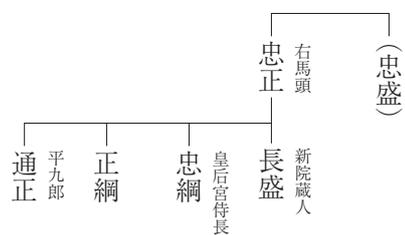
と見える⁽⁴⁵⁾。然るに天文二十一年（一五五二）以前に広橋兼秀が所持してゐた『尊卑』の系統の広橋本⁽⁴⁶⁾では、通正の位置が下がり、同系統の吉田本⁽⁴⁷⁾・谷森本⁽⁴⁸⁾・大系本では、正綱の下に折り込まれた位置にある。また『尊卑』に近い一群の系図でも、

〔菊亭本『系図略』〕

内昇殿
刑部卿正四下備前守哥人
忠盛
母仁平三十五卒五十
八才



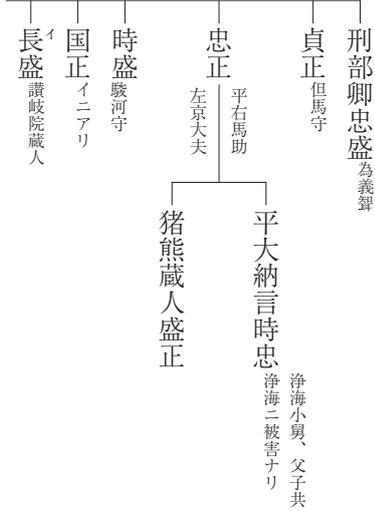
〔徳大寺本〕



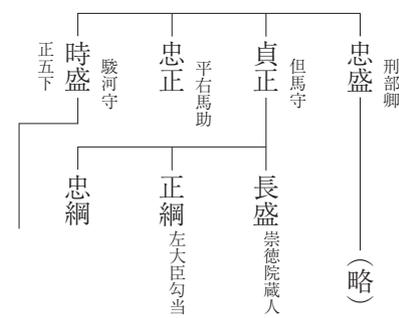
と、菊亭本『系図略』が通正を別な位置に置く。

これは何らかの事情で『尊卑』が通正を問題の位置に折り込んで写し、菊亭本『系図略』もそれを踏襲したと説明可能である。しかし『尊卑』が『保元』の影響を受けてゐる可能性がないだろうか。何故ならば通正を持たない中世成立系図がある。妙本寺本は複数系図が取り合はされてゐるが、掲載順に甲乙とすると、

(甲部)



(乙部)

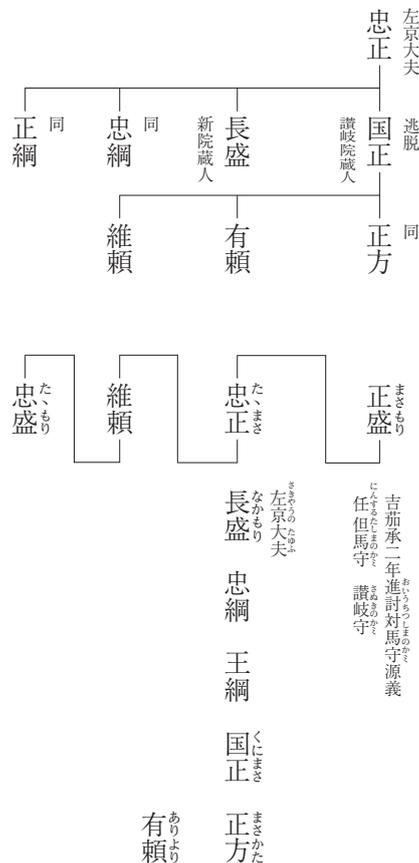


(略)

忠綱 初院藏人
正綱 藏人

とある。また拙稿に紹介したが、延慶本系図・上杉本『平家けいつ』・板本『源平系図』、『塵荊鈔』九「平氏之事」(後掲)では、国正が載るが、通正が見えない(拙稿②・④)。

〔延慶本系図〕



吉田本『平家系図』(49)

更に吉田本『平家系図』は、『平家』を利用する系図で、同系統に書陵部本(50)、恩頼堂本(51)、呆犬齋本(52)があるが、そこには忠正子孫の記載が無い。故に吉田本『平家系図』の増補による混入と思はれるが、忠正の官の「左京大夫」との一致を見るに、延慶本『平家』系図に近い(53)。

『塵荊鈔』九「平氏之事」

次男因幡守忠正也、此忠正ハ保元ノ乱ノ時、源為義ニ同心シテ、後白河院大内ヲ攻奉リ、軍兵敗北ノ後、害ニ逢玉フ、其子国正、長盛、維頼、忠綱、正綱等也

や、

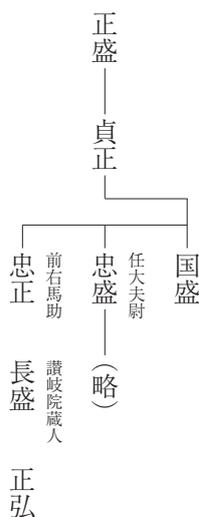
- ア、『古系図集』（東大史料編纂所蔵。電子公開）。書陵部所蔵の壬生本『諸家系図』（電子公開）、京都大学附属図書館蔵平松本『平松家系図』（請求記号二一七―三。電子公開）も参照。
- イ、『帝皇系図』（尊経閣文庫蔵。紙焼写真による。）
- ウ、『尊卑分脈』（大系本・京都大学附属図書館蔵菊亭本〔紙焼写真、以下、菊亭本『尊卑』〕）
- エ、延慶本『平家物語』巻頭系図（汲古書院刊影印）。以下、延慶本系図。
- オ、『野辺文書』所収各種平氏系図（都城市文化財調査報告書二〇『野辺・東條家古文書』）、以下、『野辺』とし、各系図の番号と名称を挙げる。
- カ、入来院本『平氏系図』（山口隼正氏「入来院所蔵平氏系図について（上）」〔長崎大学教育学部社会科学論叢〕六〇、平成十四年三月）、以下、入来院本。
- キ、妙本寺本『平家系図』（『千葉県歴史資料編 中世三（県内文書二）』の翻刻）。以下、妙本寺本。
- ク、正宗寺蔵『諸家系図』（東大史料編纂所蔵謄写本）、以下、正宗寺本。
- ケ、続群書類従『尊卑分脈脱漏』（内閣文庫蔵写本）、以下、『脱漏』。
- (4) 勉強社の慶長古活字本の影印により、蓬左本を参照（汲古書院の影印）。
- (5) 日本古典文学会の影印による。以下、文禄本系図と略す。
- (6) 菊亭本『尊卑』の脇書は『脱漏』に一致する。
- (7) 『吾妻鏡』文治元年四月十一日条（新訂増補国史大系）
- (8) 延慶本六末「大臣殿若君ニ見参之事」・四部本イ表記（汲古書院）。
- (9) 角田文衛氏『平家後抄』第三章「平孫狩り」（昭和五十三年九月）・武久堅氏『平家物語の全体像』三「大臣殿物語」の主人公―宗盛伝承の様式と平家物語の構想」（平成八年八月、初出昭和六十一年）・佐伯真一氏「副将の年齢とその母」（水原一氏編『延慶本平家物語考証
- 一』所収〔平成六年五月〕。
- (10) 半井本（内閣本の電子公開）・鎌倉本（汲古書院の影印）・京図本（電子公開）・宝徳本（陽明叢書）・流布本（筑波大所蔵古活字本）同。
- (11) 冒頭の系譜部を系図化した。後藤康宏氏「須磨寺笛之遺記」と『小枝の笛物語』をめぐって」（『伝承文学研究』三十一、昭和六十年五月）の翻刻による。以下、『須磨』と略。同系の『小枝の笛物語』（『室町時代物語大成』五）をも参照（『小枝』と略）。
- (12) 『山槐記』治承三年四月二十三日条（新訂増補史料大成）。
- (13) 但し文禄本・中院本はⅡ傍線を「木工助」とする。長門本は福武書店刊本、中院本は三弥井書店の翻刻に拠る。
- (14) 『源平闘諍録』は汲古書院の影印、『平家打聞』は島原松平本の電子公開に拠る。
- (15) 田中稔氏「史料紹介 野津本『北条系図 大友系図』（『国立歴史民俗博物館研究報告』五、昭和六十年三月）
- (16) 『須磨』では「維衡の弟を阿多知四郎時範と名く、北条四郎時政か五代の祖なり」として異なる。『小枝』は傍線を「あた」とする。
- (17) 『古系図集』は広盛の前名の経兼のみ（拙稿①）。
- (18) 『玉葉』治承二年正月二十八日条・陽明文庫蔵『勘例』「同輩雖非成業超上臈任受領例」（紙焼写真）
- (19) 拙稿「桓武平氏正盛流系図補輯之裏成」（『米沢史学』二十二、平成十八年三月）。以下、拙稿③とする。猶、書陵部蔵『蓮華王院供養部類記』所引の以下の古記録を見るに、
- 太上天王法住寺辺建立千鉢堂供養^{三十五間}、備前守平国盛造進之（右兵衛督平重盛沙汰之）（『外記』長寛二年十二月十七日条）とあり、
- 正三位平重盛、造国司国盛讓、造国司可為重儀^{任職}并連任^遷云々（『長方卿記』同日条）

また、

伝聞 勸賞 正三位平重盛(造国司国盛賞讓、件国盛猶子也)(中略)

造国司(可為重任并遷任功備前守)(『山槐記』同日条)

と見えるので補なひたい。また内閣文庫蔵『平家系図』一軸に、



とあるが、これは後述する国正の可能性があるか。

(20) 前掲後藤康宏氏論参照。『須磨』の「一谷西の城戸口の大將軍ハ、薩摩守忠度・備前守国盛」とあるのは『盛衰記』を敷衍したか。

(21) 維後は『兵範記』仁安元年十月十日条・『葉黄記』寛元四年四月十六日条所引「仁安元年例文」(史料纂集)に実在確認。盛縁については拙稿③参照。系図では『尊卑』・妙本寺本・『塵荊鈔』卷九「平氏之事」(古典文庫)に見える。

(22) 拙稿「桓武平氏正盛流系図補輯之初稿」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四十三、平成二十八年三月)参照。以下、拙稿④とする。

(23) 『尊卑』では信国子に釣り、「時忠卿為子」とする。『公卿補任』天福元年同人条も同(新訂増補国史大系)。

(24) 『吾妻鏡』建久五年四月二十一日条。

(25) 『鎌倉年代記裏書』建久九年二月五日条(増補続史料大成)。

(26) 東大史料編纂所蔵(電子公開)。「鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ一」所収『欄寝文書』「平氏欄寝家系図」が同じ。『諸家系図文書』二「欄寝家系図」には「建仁三年三十二テ」とある(『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 伊地知季安著作集 三』)。

(27) 卷四十七に「欄寝氏家譜」として引く(水原一氏編『新訂源平盛衰記』による)。

(28) 『桑幡家文書』一二「大隅国田田帳」(建久八年六月、鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家分け十)・『欄寝氏正統世録系譜』九「大隅国留守所下文」(建保五年十一月)・『同』十「欄寝清重讓状」(承久三年三月、同前 家分け一)。

(29) 角田文衛氏『平家後抄』第八章「おどろの路」

(30) 東大史料編纂所謄写本の電子公開による。

(31) 松尾葦江氏の『平家物語論究』第四章五「平家人物論」の基礎的研究(昭和六十年三月)。以下、松尾氏校異とする。

(32) 渥美かをる氏「平家花揃(蓬左文庫本)翻刻」(『説林』十三、昭和三十八年十二月)

(33) とともに『室町時代物語大成』第十二巻所収。

(34) 榊原千鶴氏「京都大学頼原文庫蔵『平家花揃』」(『名古屋大学国語国文学』七十九、平成八年十二月)による。

(35) とともに松尾氏校異による。

(36) 外題『伊勢平氏系図』一冊。内題・奥書なし。近世後期写か。系図形式。

(37) 『大東急記念文庫所蔵 古写古出版物語文学総瞰 軍記物語 五三 平家物語(四)』による。

(38) 京都大学附属図書館蔵写本。同系統として東京大学史料編纂所徳大寺本『諸氏系図』(徳大寺本と略)、京都歴史館蔵東坊城本(『京都府立総合資料館目録』に、『新編纂図本朝尊卑分脈系譜雑類要集』三冊(二四九)とある写本)、『新版大系図』四(架蔵本)・内閣文庫蔵『葦名系図』(電子公開)・『諸家系図纂』十一上「平氏」(忠正親子なし。内閣文庫の電子公開)がある。

(39) 拙稿「室町後期写清和源氏系図について」(『山形県立米沢女子短期

- 大学附属生活文化研究所研究報告』四十四、平成二十九年三月）参照。
- (40) 『塵荆鈔』九「平氏之事」、『諸家系図纂』「平氏」には「号三位禪師、法名妙光、於紀州山東莊鳶巢城十九歳ニシテ戦死」（内閣文庫蔵。続群書類従「桓武平氏系図」が同）に刑死以外の説が見えるが、伝説の域を出ない。
- (41) 鎌倉本ほぼ同だが、傍線は「侍」。流布本系の古活字本も同。内閣(二)本は「傳長」を「もちなか」とする(電子公開)。
- (42) 金刀比羅本(日本古典文学大系)・陽明本甲(陽明叢書)・九条本(日本古典文学影印叢刊)・東大国語本(東京大学国語研究室資料叢書)・九大本(在九州国文資料叢書)・学習院国文本(電子公開)・京師本・杉原本(共に古典研究会)・内閣(一)本(電子公開)同。
- (43) 班山本・根津本・竜大本は電子公開。蓬左本は近藤政美氏他校註本の翻刻、早大本は早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』による。
- (44) 陽明叢書『人車記』の影印による。
- (45) 国会図書館本も同配置(但し「道正」で、「保元乱ニ父子五人被誅了」と朱書(電子公開))。
- (46) 国立歴史民俗博物館蔵一冊。紙焼写真による。
- (47) 天理大学図書館吉田文庫蔵。紙焼写真による。
- (48) 宮内庁書陵部蔵。紙焼写真による。
- (49) 天理大学図書館吉田文庫蔵(六二一一九)近世初期写、折本一帖五紙。
- (50) 壬生本『源平系図』一卷(四一五・二二三)。電子公開による。
- (51) 四天王寺国際仏教大学図書館蔵『源平系図』。近世写一卷。
- (52) 外題『源平系図』。近世中期写一卷。
- (53) 『野辺』二〇「平氏系図」は断簡で当該部を脱落。
- (54) 『鹿兒島県史料 旧記雜録拾遺 家わけ十』所収。
- (55) 『兵範記』久寿元年四月十四日条・『台記』同十一月十六日条(史料大成)に確認。
- (56) 半井本・鎌倉本・竜門本・古活字本同。